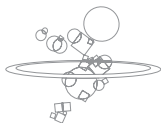


無（ ） / ムジョウ

志津



夜光虫のランプ

Heartlessness, Impermanence

by
Shizu 2018

cover design and art direction

by
Masaki TSU + Matthew A. KEITH
(t. m. production)

contents

リンゴの親離れ

9

流れ、落日の果てへ

35

アナタノタメニ

89

デッドマンズマスク -Deadman's Mask-

111

○

無
(
)
/
ム
ジ
ヨ
ウ

リンゴの親離れ

赤い実が窓の外に点々と広がっている。その正体は、母さんが管理しているリンゴ畑のものだ。小ぶりだけど鮮やかな色は、意識しなくても自然と目に飛び込んでくる。

その赤が、俺は苦手だった。それが景色に溶け込む頃、俺はどうしようもなく卑屈になり、幼くなり、そして弱くなってしまふ。俺にとってのリンゴの色というのは、ある意味呪いのようなものだった。

ちようど収穫がピークに差し掛かってくる、嫌な季節がやってきた。自分でどうにか回避できればいいのに、こればかりはどうしようもない。家事や仕事を手伝ってやっとなにできない小銭では、片道分のバスチケットも満足に買えないし、最近やっと一三歳になったばかりの子供が、徒歩でちよつと遠出と洒落込めるのは、せいぜい隣の村とのあいだにあるポロい

教会くらいだ。

夏の暑さを身体が忘れ始めるこの時期になると、俺が住んでいる国、そして小さな村では誰もが忙しくなる。長きに渡り、事実上他国の支配下にあったというこの土地では、一三年前に国の行く末を案じた青年活動家たちによって、地の利を生かしたゲリラ戦が繰り広げられ、武力で前政権を倒し革命を成功させた——という歴史がある。

その記念日がまさに今日。今日という日はみんな、平和を祈り、革命によって散ってしまつた尊い命を偲び、今を共に生きる家族たちが集まり、悲しみも喜びも分かち合うというわけだ。

俺は生まれてから一度も墓参りというものをしたことがない。理由は簡単。この村に、俺の家族が眠っている墓がないからだ。

昔から、それこそ生まれた時から、俺は母親とふたりで暮らしている。父親については、俺が生まれる前に死んだとしか聞かされていない。親戚の話も聞いたことがないから、生死以前にそもそも存在するのもかも怪しいけれど、ひとつだけわかっているのは、この村が母さんや父さんの故郷ホームではないということ。

俺自身の見た目に関しては、目元は母さんに似ているとよく言われるが、色はちがう。母さんの目はブルーで髪も明るめなブロンドなのに対して、俺の目はグリーン。そして同じブ

ロンドでも、俺の方は色がくすんでいる。

外見は多分父親に似たんじゃないかと思ってるけれど、俺は彼の見た目がどんな感じなのか、一度も見たことがないからわからない。そもそも名前すら知らない。ないない尽くしでいつそ清々しい。

片親しかいない家庭なんて今時珍しくないとは言っても、何気ない一言や状況によって、自分と他人との違いが浮き彫りになることだってある。それがまさしく今の状況。友だちやクラスメイトがみんな、家族揃って村から少し離れた高台にある共同墓地ネクロポリスに行くとか、普段は離れて暮らしている親戚同士が集まって、一緒にご飯を食べるとかしているのを、俺はいつも遠くから眺めている。

最初はなんの意味があるのか理解できなくて、不思議に思いながら日々を過ごしていたのが、物心がついてそれなりに人格ってやつが形になっていくと、無性にイライラしたり寂しくなったりして。この、やりようのないドロドロとしたものからどうにか目を逸らしたくて、母さんに昔話を強請ってはかわされて。母さんはなぜか、俺が生まれる前のことや、自分のこと、そして父親のことを頑に話そうとしない。

何年か前の今日、俺はどうしても父さんがどんな人だったのか知りたくて、母さんが留守にしている隙に部屋中をひっくり返し、なにか手がかりになるものはないかと探し回った。せめて手紙の一通でも、昔着ていたかもしれない男ものの服とかでも。父さんに繋がるかも

しれないものだったらなんでもよかったのだ。

やっとの思いで見つけたのは、屋根裏部屋に置いてある本に挟まっていた一枚の写真。でも写っていたのは、今よりも若くて、お腹が大きくなっていた頃の母さんだけ。母さんの肩に手が回されていたのに、その人物であろう父さんの部分は、破られていてどこにも見当たらない。

そして、別の日にまた屋根裏部屋へ忍び込んだ時、あの写真は跡形もなく消えてしまっていた。

「ジュニア」

一仕事終えて、休憩しに戻ってきた母さんが仕事用の手袋を外しながらやってくる。出てくるのは、日に焼けて傷が多くて、これまでの苦労が滲み出ている細くて小柄な手。左手薬指に光る、青みがかった小さなダイヤモンドがひとつある指輪だけは、ずっと変わらさずここにいる。

「今日の手伝いはもういいわよ。後は倉庫の片付けだけだから」

「わかった」

旧型のテレビをつけると、ちょうどニュースが始まったところだった。眠くなる声色のアナウンスと一緒に流れている映像は、前政権を象徴していた旗が降ろされ、革命家たちの旗に替えられる瞬間を記録したものだ。この様子は教科書にも載っているから、嫌でも頭に残っ

ている。

一緒にブラウン管を見つめていた母さんが、無言でチャンネルを変えていく。でもどの局も同じ内容なのが気に入らないらしく、ため息をつきながら台所に移動し、お茶の用意を始めている。俺が生まれる頃イコール父さんはもういない頃でもあるからか、いつもは気さくな性格なのに、今日という日に限ってはいつもこんな感じだった。

「ねえ」

「んー、なあに」

「俺たちは行かなくていいの」

「行くって、どこに」

「墓参り」

「行かない」

「なんで父さんの墓参りにいかないの」

「そもそも、お花を添えるお墓がないからよ」

「どうして墓がないのさ。墓もだし、父さんの写真だって一枚もないじゃんか」

俺としては、墓がないと言うのは俺を諦めさせるための嘘だと考えているから、これで何回目になるかわからない質問を口にする。そうしたって、どうせ母さんはいつも通りの返ししかしてこないのも折り込み済みだけど、今日はもしかしたら——そんな期待を捨てきれ

ずにいる。が、結局俺の耳に届いたのは、俺の求める答えではなかった。

「別にお墓なんてなくても、父さんとはいつも通じ合っているからいいのよ。たまに空を見れば、きっとそこから見守っていてくれる……それで充分」

母親からこんな風に言われてしまうと、息子の俺としては大人しく引き下がるしかない。それでも今日こそはなにか、自分の父親ルックについて知りたい。その一心で口を閉ざす母さんを見つめていると、向こうは俺が睨みつけていると勘違いでもしたのか、さつきより少し強い口調で

「ジュニア」

「なんだよ。別に変なこと言ってないだろ。父さんの話をすると、いつもそうやってムキになる」

「ムキになっているのはアンタの方でしょ。そんなに意固地になるのだから、どうせ友だちや周りの人たちと同じことができないのが嫌なだけでしょう」

「……そんなじゃない」

と、内心言い切れずにいるのが情けない。母さんの言う通り、俺は周りと違う行動をとることによって、自分だけ仲間はずれになっている気がして、すごく心細くなってしまふのだ。なんで俺には父親がいないのか、なんで俺には母親しか家族と呼べる人がいないのか。

なんで、俺は、みんなみたいに——これ以上言っちゃって、むやみに母さんを困らせるだけ

だと自分なりに察したのが二年前。そのことに気づけただけでも、自分は分別のある大人に近づいているんじゃないかと、そう思い込んで自分をなぐさめてみたって、実際の俺はまだ子供でしかない。更に不名誉なことに、世の中には自分が頑張ったってどうしようもないことがあるなんて現実には、多分同年代の子供よりはよく知っている。

「そんな顔しないの。仕事が終わったなら、いつものアップルパイ作ってあげるから。好きでしよう」

確かに、母さんが特別な日に作ってくれるシナモン抜きアップルパイは、凄くおいしいから好きだし、魅力的だけれども。今の俺にとって、それは毎行き着く妥協でしかない。部屋にもって勉強でもするか読書でもするか、それとも昼寝でもするか……どれもしくりこなくて、俺は身支度を適当に済ませ、無言で家から逃げだした。

うちには特別厳しい決まりというものはなく、ただ出かける時は一七時までには帰るのだけは徹底している。友だちと遊んでいるのに夢中になっていたら、いつのまにか夕日が沈み始めて……なんてのはよくあるパターンで、そんな時は全力疾走で家に駆け込み、仕事帰りの母さんより早く着けばおとがめなし。ただ今日に関しては、こんなユウウツな気持ちでいて、はたしていつも通り家に帰れるのか自信がない。

アテもなくただふらふらと、気の向くままに舗装されていない道を歩き回ってみる。リン

ゴのコンポートを作るのが上手なおばさんの家の前、最近赤ちゃんが生まれたいらしい若い夫婦が住む家の前、誰かが通ると、飽きずに吠えるアホ犬を飼っている学校の先生の家の前、エトセトラエトセトラ。どこの家からもいつもの生活の音がしないのは、今頃みんな同じ目のために動いているからだろう。

たまにすれ違う人たちも、見慣れないスーツ姿だったり、普段着でも控えめで地味な色合いの服を着て、その手には決まって花東がある。ぞろぞろと連れ立って歩く姿を不気味に感じる自分と、なんとなく壁を感じる自分。寂しい、と感じるのを素直に認めたくないのは、さつき母さんに言われた一言があるからだ。

そんな中、同じような人たちの列から外れ、別の方向に歩く白髪の人がいる。猫背気味で、おぼつかない足どりでふらふらと歩いているのは、お互い顔は知っているものの、ほとんど関わったことのない人物だった。最後に挨拶したのはいつ頃だったかはつきりしないけれど、なんとなく俺は早足で歩いてその人物に並ぶ。

「こんにちは」

「やあ、君は確か……ドナさんとこの。随分久しぶりに顔を見たましますねえ」

実際こうして道端でも会うことが少ないのは、このおじいさんが酒場の店主で、生活リズムが俺とはちがうからだろう。おじいさんの酒場は大通りから外れているし、営業しているのかよくわからない外観をしている。でも、店の前にある電飾スタンドからはレトロな雰囲気

気が漂っていて、その扉の先にはどんな世界が広がっているのか、前から少し興味があった。

「おじいさんは、みんなみたいに墓参りには行かないの」

「いや、ちょうど向かっているところだよ」

「でも、この先はなにもないよ」

「僕が行くのはまた別のところだよ。まあ他の住人たちはあまり行かないようだが……」

おじいさんが指で示したのは、共同墓地ネックロポリスがある丘とは反対の東、雑林がある方向。たまに遊び場になっているそこになにがあるのか。思いつかなくて首を傾げてみれば、おじいさんは「もしかして、雑林を抜けた先には行ったことがないのかな」

「危ないから奥まで行くなって、母さんが」

「危ない……あそこに危険なものがあるとは思えませんが……あの先にも、墓地があるのですよ」

「えっ、初めて聞いた」

「ポッターライフルド無縁墓地ポッターライフルドといってね。そうですね……供養してくれる家族や友人がいない人たちの眠る場所、といったところですよ」

ずっとこの小さな村に住んでいて、まだ知らない場所があったことに自分でも驚いた。俺には直接関係がなさそうな場所ではあるけれど、行ったことがないというだけで妙に気になってくる。黙って聞いている俺に、おじいさんは更に続ける。

「この村には所帯を持たず、誰とも交流をせず老後に孤独死、なんて人はほとんどいないのですがね。一三年前の内乱の時、ここからそう遠くない場所で革命勢力の掃討作戦がありまして、その時に亡くなった人たちで身元が不明、もしくは身寄りのない人たちを埋葬しています。それぞれに立派な墓石なんてのは用意できないし、せめて名前がわかる人の名前を刻む位しかできませんが、それでもないよりはいいかと」

「へえ……そこ、おじいさんが管理しているの」

「ええ、これから様子を見に。まあ、あそこに訪れる人間は僕しかいませんので」

「そうなんだ……」

「いやいや、なんかすみません。君には大して面白い話でもなかっただろうに、長々と引き止めてしまって」

申し訳なさそうにする酒場のおじいさん、もとい墓守のおじいさんに、そんなことはない。と俺は首を振る。この人は、今日という日のために動く人間のひとりでも、他の人たちとは事情が少しちがう。そんな人がいるってだけで、俺にとっては少しだけ救いになった。

俺はその後も度々目にする、似たような格好をした人たちが向かう先とは別の方向に足を開ける。道なりに五〇〇メートル位歩いていけばY字路に差し掛かり、左手に進めば古びたバス停が見えてくる。二時間に一本のペースで運行しているバスがそろそろ到着する頃だか

らか、既に誰かを迎えに来ている人がいて、その中には友だちもいた。

いつもだったら声をかけるけれど、今は彼らと挨拶すらするのが億劫で、俺は向こうの視界にぎりぎり入らない位の距離を取り、そのままなんとなくバスが来るのを待つてみる。外から俺や母さんを訪ねてくる人間はまずいないし、かといって俺がバスに乗るには色々と足りない。それでも、未だに晴れない気分を変えてくれるかもしれないなにかを求めて、俺はその場で雲の流れを追い始めた。

特になにかの形に似ている訳でもなく、ゆっくりと輪郭が崩れていく様子でしか変化がない姿に飽きてきたその時、古い型だからかやたら響くエンジン音と、一緒に巻き上がる砂埃がバスの到着を知らせる。パーッと、とまぬけなクラクションが鳴れば、バスの扉が開き、そこから数人降りてくる。バス停で待つていた人たちが、それぞれ客人と挨拶を交わし、村へ向かうべく動き出した。

バスはY字路の右手へとUターンし、空気が汚れそうな黒い排気ガスをまき散らしながら、どンドンその姿を小さくしていき、客人との再会に喜ぶ人たちが、すれ違う俺への挨拶もそこそこに移動し始める。村へ向かう。行き先はもう聞かなくてもわかる。それを示す証拠に、さつきバスを降りた人たちもみんな、今日の村の人たちと似たような格好をしていた。

結局、気分転換どころかますます孤独感が強くなっていく中、俺はこの後どうしようかとバス停の方を見やる。すると、そこにはまだ人影があった。バスが残した砂埃が風に流され

て現れたのは、なんとなく近寄りにくそうな、いんきの男だった。

ぱっと見た感じ五〇代位に見えるその人は、前にテレビで観た、ウエスタンっぽい茶色の帽子とロングコートを着ていて、手持ちのカバンひとつ持ってその場にたたずんでいる。昔この村に住んでいた人だろうか。その割には、いかにも里帰りとか墓参りに来ましたが、という感じがしなくて、むしろ『荒野をさすらう孤高のガンマン』とか言われた方がしっくりくるような。

「少年、ちょっといいかい」

辺りを見回していた男が俺に気づいたらしく、深く被っていた帽子をずらし、少し日焼け気味の顔をさらけ出す。帽子に隠れていた彼の髪と目の色が、自分のと同じだったことに驚きを隠せない。それに、無精髭を顔中に散らしているその人の、顔つきが思いの外優しげで、最初に見た時の印象と実際に話す姿が、俺の中で噛み合わずにいる。

「……なんですか」

「人を捜していてね。といつても、実は私もファミリーネームしか知らないのだが……
『ジュード』という名前の人、この村にいないかな」

ジュード。聞き慣れない名前を頭の中で繰り返しながら、村にいる大人たちをスライドさせてみる。でも思い当たる人は浮かばない。しばらくうなづいていた俺を見たおじさんは、そうかと頷いてみせつつ、

「例えばだが、ここ数年のあいだで引越していった人とかはどうだい。思い当たる人はいないかな」

「うーん。いない、と思うけど」

「そうか……」

「その人の連絡先とか知らないの」

「ああ……実は、その人とは昔一度会ってそれっきりでね。伝をたどってやつとここまで来たんだが」

そう説明しながら、おじさんがあからさまに落ち込んでいるのがわかる。なんでジュードという人を捜しているのか、どこからやってきたのかもわからない。でも首都から遠く離れた、観光地でもない辺鄙なこの村に所縁のない人間がわざわざやってくるということは、よっぽど大事な用事があるのかもしれない。

まだ会って五分もたっていない人間なのに、俺はこのおじさんから妙に目が離せなくなっていた。知らない人についてはいけなないと、先生にも母さんからも口酸っぱく言われているのに、目の前の人がこれからどうするのか、どこに行こうとしているのが気になる。それは、外の人間と会話する機会がないからとか、今日という日と無縁そうな人間への好奇心とか、そういう単純な理由なのだろうか。

けれど、俺の根っこ、もっと原始的な部分は、そうじゃないと必死に首を振っている気が

して。

「おじさん。バス、次は二時間後だよ」

「えっ、そうなのか……まいったな」

「もし他に用事がないならさ、村を案内してあげようか」

突然の提案におじさんは目を丸くする。構わず俺は続けた。

「おじさんが捜している人のこと、俺は知らないけどさ。大人ならもしかしたら知っているかも」

「それは有り難いが……迷惑にならないかい。少年も出かける用事があってここにいるんじゃない」

「逆。ヒマすぎて困ってた。バスの運転手になるにしても、身長が足りないってさ」

少しおどけて言ってみると、おじさんは心配そうにしていた顔を歪ませる。そして帽子を直し、俺の後に続いて村へと歩き始めた。

とは言ったものの、歩き慣れている筈のゆるやかな坂道を、知り合ったばかりの人と一緒に進むのはやっぱり落ち着かなかった。でもそれは嫌な感覚ではなくて、むしろ楽しくなってきた。母さんや友だちと一緒にいても、こんな風になるのはそうなのに。

そうして村に着いてからしばらく、大通りを選んで歩いているのに、他の大人たちをひと

りも見かけなかった。普段は嫌でも誰かしらと会うのに、意識し始めると急にいなくなってしまうのが不思議だ。まあ、みんなの行き先は決まっているけれど。

俺は直感で、おじさんは海外からやってきた人だと勝手に思い込んでいた。でもここに着くまでに時々振り返りながら聞いてみたら、実際はこの国の生まれで、俺が生まれる頃まで首都で医者として働いていたらしい。その後は仕事の関係で、国を問わず色んなところを飛び回っていたのが、途中大規模な列車事故に巻き込まれてしまい、昏睡状態のまま病院のベッドから三年は動けなかったとか。

「で、なんとかリハビリを終えてからこっちに戻ってきて、現在に至る。といった感じかな」「すごい。そんなに長く入院していたのに、また旅を続けられるなんて」

普通に話しているけれど、それってかなり大変なことじゃないのか。俺は控え目に聞いてみた。対しておじさんは特に変わらず、穏やかな空気を崩さない。

「ああ。まだやり残したことがあるし……それに正直、もう一生分は眠ってしまった気がするからね」

「それってもしかして、今は全然寝てないとか」

「そうだよ……って、言えたらカッコいいかな」

「なんだ、びっくりしたあ」

そんな調子で話していた時、俺は平坦な道を歩いているのにも関わらず、足がもつれてそ

の場でバランスを崩してしまった。次の瞬間には膝辺りにきそうな衝撃を想像して、思わず目をつぶる。でも、俺の身体が触れたのは地面じゃなくて人間の手。

「危なかった。大丈夫かい」

「う、うん」

おじさんが肩を掴んでくれたおかげで、どうにか転ばずに済んだみただった。お礼を言わないと、そう思いながらも、俺はこの偶然のやりとりに対して無性に感動してしまった。別に特別なことではないとは思うけれど、友だちが親と一緒に歩いている時に、同じようにされていたのを見かけたことがあった。

「いなかったからわかんなかった。こういうの初めて」

「初めて、とは」

「なんていうか……俺にも、おじさんみたいな父親がいたらなあって」

思わず口にした一言を、おじさんは聞き逃さなかったらしく、深刻そうな顔でこっちを見ている。でも俺が続けず黙って歩いていると、なにも言わずに隣にやってきた。並んで歩くのに慣れてきた頃、俺は気になったことを聞いてみた。

「ねえ、ジュードって人見つけたら、おじさんは自分の家に帰るのか」

「ん……うーん。そうだなあ……その時になってみないとわからないが、帰るとしても寄り道しながらかな。と言いつつ、結局そのまま旅を続けているかも」

「いいなあ……俺もおじさんみたいに旅してみたい」

「えっ」

「もちろん、今すぐは無理でもさ。もう少しでかくなって、ひとりでも生きていけるようになったら」

この狭い場所しか知らない俺にとって、色んな場所を旅してきたというおじさんの存在は不思議そのもので、でも優しく頼もしい。考えみれば、お互い名前すら知らないし、出会ってから一時間もたっていないのに。それでも気になってしまうのは、髪と目の色が俺と同じで、時々微かに土と煙草の匂いがあるおじさんが、会ったことのない存在（ちがいない）はこんな人だったらしいのという、心臓の奥にしまっておいた理想に近いからだろうか。

そんな気持ちからの一言だったのに、おじさんはなぜか難しい顔をしてみせる。

「少年。自分からひとりになろうとするな」

「え……」

「君がそう望むのは、小さな村に突然現れた男（オトコ）がもの珍しいからだ。だからこんな男に惑わされずに、家族や、今の居場所を大事にした方がいい。君の父さんも、きっとそう願っている」
まるで突き放すような言い方に、俺の身体が一気に冷える。

「そういうの、ずるい」

「……少年」

「俺ですら会ったことのない父さんの気持ち、なんでおじさんにわかるんだよ」

「……確かに、君の言う通りだ。少年、すまなかった」

鼻の奥に痛みを感じながら、震える声でそう反論すれば、おじさんは俺を気遣うように微笑んでみせながらも、細めている目を少し揺らす。これは見覚えがある。母さんが困った時にするやつと同じものだ。

さっきおじさんに対して偉そうなことを言ったクセに、そういう自分はこれか。一気に居心地が悪くなって視線を地面に落とすと、おじさんはためらいがちに俺の頭をそつと撫でくる。母さんのものとは全然違う、髪に触れる手の大きさを重さが、俺の沈んだ気持ちを少し軽くしてくれた気がした。

太陽が真上に昇り、少しずつ西に傾いていく内に雲は流れてしまった。夏よりはましでも、目に刺されば眩しい日差しを浴びながら、俺はおじさんを連れて無縁墓地ポツクレスフィールドへ向かう。あそこにはまだ墓守のおじいさんがいるだろうし、あの人なら、ジュードについてなにか知っているかもしれないと思ったからだ。

雑林に入れば、太陽が隠れて周りの空気が変わる。足元が歩きにくくなるのに注意しつつしばらく進むと、木に囲まれた空間から拓けた空間に繋がった。そして目の前には、晴れた空の下にある筈なのに、光が届いていなさそうな墓石が沢山並んでいる。

「ここに、その墓守のご老人がいるのかい」

「多分。俺もここに来るのは初めて。母さんに駄目って言われていたから」

「そうか……お母さんとの約束、破らせてしまったのか」

「人助けしているだけだし、別に大丈夫だよ……あ、あっちにいる」

おじさんが申し訳なさそうにしているのを横目で見つつ、俺は墓石周りの草むしりをして
いる人物の元に駆け寄る。墓守のおじいさんは白く濁り始めている目を細め、俺だとわかる
と笑って迎えてくれた。そして、俺の背後にいるおじさんにも気づく。

「ああ、君か……そちらの御仁はもしや、ここに眠る誰かの縁者かな」

「ううん。人を捜しているんだ。おじいさんなら知っているかもって思ってたさ」

「御老人。突然すみません、このように静かな場所を騒がせてしまって」

おじさんが帽子を取り、頭を深々と下げる。構いませんよ、とおじいさんが手を差し出し、
ふたりは握手を交わす。そして、おじいさんは帽子を脱いだまま、真剣な顔つきで本題に入った。
「私が捜しているのは、ジュードという名の者です。一三年前、ゲリラ戦の混乱の最中この
村に向かったと訊き、ここへ来たのですが。心当たりはありませんでしょうか」

おじいさんの問いかけに、おじいさんは目を細め、もう一度名前を確認する。すると、おじ
いさんは無言のまま、俺たちを奥の方にある墓石の前へと案内してみせる。それが彼の答え
だった。

「残念ながらここに遺体はなく、形のみ墓となりますが……『マイク・ジュード』という革命軍の兵士でしたら、もうこの世にはおりません」

そう言い終えると、おじいさんはもう一度頭を下げてから、荷物を持ち、俺たちを置いて雑林へと消えていく。俺は墓石に刻まれた名前を見た後、急に息苦しくなり、その場にしゃがみ込んでしまった。マイク・ジュード——おじいさんは確かにそう言った。

(俺と、同じ名前……死んだ時期も……つてことは、ジュードつてもしかして)

「まさかと思つてはいたが、その髪と目の色……あの男と同じ……なんとということだ。私をここまで導いてくれた少年が、縁者だとは」

俺の様子を見て全てを理解した、そんな様子でおじいさんは俺を見下ろす。おじいさんの影が俺を囲み込み、今まで彼から感じたことのなかった恐怖心を俺に植え込んでくる。見上げた先にあるのは、知っている筈なのに、知らない顔。

「少年。君の亡き父親は……一三年前、私の息子を殺した」

「は……な、なに。なに言つてんの」

「当時警察官だった息子は、革命軍の決起によつて戦場と化した都で、市民を避難させている最中、全身に無数の銃弾を浴びた。……その時、目の前で息子を撃つた人物こそ、ゲリラ兵たちを指揮していたジュードだ」

おじいさんは奇妙な程冷静に語りながら、ずっと閉じていたコートを開き、腰元に手を伸ば

す。取り出したのは、銃身が短くなっているショットガン。弾を込めながら、その銃口はまっすぐ俺に向けられる。

「国が他国から解放されても、自分の息子の屍を踏み越えて得た平和など、それは私にとって本当の平和にはなり得ない。私は、自分の戦争を終わらせるためにここまで来た……なのに……私は」

そう言い終えた直後、獣のような咆哮と共に、銃口が叫ぶ。俺は反射的に瞼を固く閉じる。が、なにかが砕けた音と焦げ臭いが鼻につくだけで、自分への痛みがない。

そつと瞼を開くと、俺に撃ち込まれると思っていた銃弾は、背後にあつた墓石に逸れていたらしい。俺は身体から力が抜けた拍子に、股間の辺りをじつとりと濡らしてしまった。布が張り付く感触が気持ち悪いけれど、今の俺にそれを気にする余力はない。

「私は、こんなものを破壊するために、ここまで来たというのか」

ショットガンを手放し、力なく膝を落とすおじさんの姿がやけに小さく見える。そのまま喋らなくなった彼に対して、俺はなにでもできず、黙って見つめているのが精一杯で。この状態は、銃声を聴きつけた村の警官たちが駆けつけるまで続いた。

「マイク、大丈夫か。怪我は」

手を差し伸べてくる警官の手をとり、俺はやつとの思いで頷く。その隣でおじさんは拘束

され、駐在所に連れて行かれそうになると、急に思い出したかのように喋りだす。

「親が他人より自分の子を優先するのは、罪だというのか。息子の命を絶つた者がいるのならば、真相を暴き、犯人をこの手で殺してやりたいと思うのは、自然なことではないのか。許すことと諦めることは、一体なにがちがうというのだ……」

痛々しい声に思わず顔を上げる。目が合った瞬間、おじさんは縋るような目つきで俺に問いかける。

「偽善と我が子を天秤にかけられるものか。私は間違っているのか……教えてくれ、少年。
私は……」

おじさんと俺、どちらもお互いの姿が見えなくなるまで、ずっとお互いを見つめていた。すると、いつの間にか来ていた村人たちをかき分け、母さんが現れる。そして真っ先に俺の元へ駆け寄り、息を切らしながら力一杯抱きしめてきた。

「ジュニア……ああ、よかった。無事でよかった……」

自分を包み込む体温や匂いが、やけに懐かしく感じる。同時に安心して緊張がほぐれてきたけれど、今の俺にはそれに歯止めをかけるものがあつた。俺は反射的に、母さんの肩を押し返してしまふ。

「どうしたの、どこか痛むの」

「全然よくない」

「よくないって」

「なにも知らなかった。父さんの名前も、父さんがやったことも全部。なんで教えてくれなかったんだよっ」

俺は勢いまかせて母さんに怒鳴りつける。母さんは一気に顔を歪ませる。でも、母さんもこれ以上隠すのは無理だと思ったのか、初めて拒否以外の言葉を口にした。

「今まで話さなかったのは……私を愛してくれたのに、私たちを置いて先に逝ってしまったあの人を……許せなかったから」

「許せなかったって……」

「アンタはきつと……父さんのことを知れば、どんな風を感じたとしても、きつと心から父親として尊敬し、愛してくれる。でも、あの方は親としてなにひとつ、アンタに返せない……それが、私にはどうしても許せなかったの」

「そんな……」

「……本当に、ごめんなさい」

そう言ったきり顔を伏せる母さんに、俺はかける言葉が見つからない。母さんだけじゃない。あのおじさんだって、マイク・ジュードという男に狂わされていたのだから。

誰が間違っていたのか、誰が悪いのか、正直俺にはわからない。だって、国を変えようと戦った父さんは。自分の子供を想う、あのおじさんは、俺の母さんは。

自分の父親ルイッを知ろうとしていた俺は——間違っていたのか。

まただ。また、俺にはどうしようもないものが容赦なく襲ってくる。それを俺は受け入れないといけない。そして、俺は。

母さんの目から涙が溢れている。正直泣きたいのは俺の方だけど、もう一三歳になるのに、母親につられて泣くわけにはいかない。俺は、奥歯が悲鳴をあげるくらい必死に涙を堪える。

そんな中、母さんの指輪に添えられたダイヤが、涙と西日を受けて青く小さな光を発していた。